

## 97 シラホシゾウ属の習性(Ⅲ)

——誘引源への飛来と3種の発生消長——

福岡県林業試験場	萩	原	幸	弘
	小	河	誠	司
	中	島	康	博
	高	木	潤	治

マツを加害するシラホシゾウ属の飛翔活動が夜行性であることは一般に知られているが、その実態はどうか、また、これまで同一に取り扱われている3種の季節的発生消長に差がないかを検討するため、当场および附近のアカツ林やその周辺で、1968~9年に諸調査を行なった。その中から標記事例について報告する

## 1 材料と方法

誘引源……マツ丸太、少量の小割餌木、組成別(樹皮、木質、針葉)餌木とその油状物、市販誘引剤T-7・5E、Gなど。

イ 夜間観察……誘引源を目の小さいネット(縦、横60cm、高さ120cm)で覆い、このネットに集まる虫を30分毎ないし任意の時間に採取計測する。誘引源の設置点は誘引による移動に限定されるため、松林以外畑のや林道、時にはコンクリート造りの屋上を利用した。

ロ 3種の混生と発生消長の調査……アカツ林内に設置した毒餌木、伐採直後の土場松材、市販誘引剤(3器)それにイの調査で得た誘致虫や次世代新成虫を森本(1962)の方法で分類した。

## 2 結果と考察

イ 誘引源への飛来状況について

各シーズンを通じ、計40回あまりの夜間観察から、誘引源への定着状況を例示すると図-1のとおりである。

成虫の誘引源への飛来は日没後30分~1時間頃から始まり、日の出1時間前後に終る。その間、飛来のピークはシーズン、天気、風等により変化するが、概して、日没2時間後頃の夜半と日の出前3時間頃にある。強い風が連続する場合(ネット附近で30分間の平均風速3m以上)は飛来が止まるが、短時間に吹く<sup>レ</sup>にわか雨<sup>レ</sup>前の風などでは、湿度の高まりと相まって、却って誘引圏を拡大し、虫の誘引源への反応を容易に

することが推察される。

なお、成虫の被誘引行動と温度との関係は、越冬成虫の動き始めるのが15°C内外であり(木村ら1951と合致)、飛翔活動の活発化するのが19~20°C以上である。高温乾燥期に入ると虫の反応は降雨後の数日間に集中するようになり、乾燥期は特定の場所に留まって、誘引源への活動を停止するものと推察される。

ロ 3種の混生割合と発生消長について

採取した350件あまりの試料につき、3種の混生割合をみると調査数17,116頭でニセマツノシラホシゾウムシ11%、マツノシラホシゾウムシ43%、コマツノシラホシゾウムシ46%となりニセの比率が低い。

ニセについて誘引源別にみると、少量の縦割餌木で4%に対し、土場材や丸太餌木では40%、市販誘引剤では19%となっており、3種の反応は材料やその鮮度により差があるように思われる。

幹(餌木)で、ニセの誘致数の高いことは川畑ら

(1965)の調査にもあり、これはニセが最も初期に誘引されるためなのか、それ以外の習性に基づくものかを明らかにする必要がある。

3種の発生消長については定期調査の出来た市販誘引剤による結果を図-2に示す。

図によれば3種ともほぼ同シーズンに山をえがくことが認められる。これを成虫の飼育調査とあわせて判断すれば、春先きの山は繁殖部以外の場所で越冬した成虫によるもの、梅雨期からの山は幼虫越冬によるもの、さらに秋口ごろからみられる山は新成虫に基づくピークと推察される。

3種の発生消長については竹谷ら(1968)の報告があるが、今後更に地域による優占種の違い、また、成虫の長い寿命期間中における発生消長の変化と餌の季節的な分布変動との関係について調査検討したい。

図-1

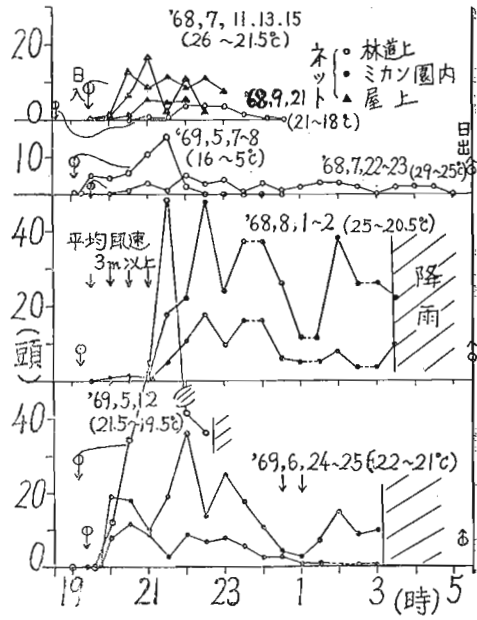


図-2

